

一

問一 a 明後日 b 物資 c 周囲

d 貸(す) c 過程

問二 A 喜 B 楽

問三 人は、仲間の時間と速度を合わせ、他者とつながって生活しており、そのこと自体に幸福を感じるように生きていくということ。

問四 「それ」とは、自分の時間を、自分の欲求を最大限満たすために効率化を図って消費しようとすることであり、そのことと、物資の豊かさや情報技術の高さに依存して自分だけの時間を確保するという考え方は、どちらも他者とのつながりを欠いている点で同じであるということ。

問五 協働したり、分かち合ったりという人とつながる社会的な時間こそが、人間に幸福感をもたらすものであるため、効率化を図って自分一人の時間を確保した結果、かえって満たされず、孤独感から無為の時を過ごすむなしさを味わうことになるから。

二

問一 a::イ b::エ c::ア

問二 ジャージャーは孫を特攻で失い、彼が遺される者たちのことも考えず自ら特攻に志願したのかを知りたかった。しかし、特攻隊員は、自らの意思でなく成績順に強制的に選ばれるという伍長の話を聞き、亡くなった人の無念さや理不尽さに強いショックを受け、その動揺をなんとか抑えようとしている。

問三 スピードも遅く、敵に狙われやすい練習機を実戦で使わなければいけないくらい、軍の機も撃ち落とされ物資も不足して、戦争も終盤に来て、敗戦が色濃くなっている状況。

問四 女学生や上官、警備兵、新聞記者たち周囲の人々の、特攻の成功を願う純粹な祈りに対して、貴重な戦闘機や仲間を失いながらもおめおめと一人生き延びてしまった罪悪感にひとり苦しめられていたが、自分に生きていてほしいと願う「ぼく」や「カミ」の素朴な願いが伍長の心に響き、死ななければならぬという強迫観念から解放され、人間らしい感情を取り戻し、生きていることを喜ぶ気持ちへと変化した。

問五 神さま

問六 特攻隊員たちを見送る女学生たちの純粹で残酷な特攻の成功への祈りが、伍長の自身の死を願う呪いとして彼を苦しめていたことを知り、彼の深い苦しみをいやすためのかけるべき言葉も見つからないままどうしてよいか戸惑っていた。しかし、自分も「あちや」や「イチミー」に女学生たちと同じように手を振って彼らを見送ることで、知らずして死を祈る「呪い」を彼らにかけていたことに気づき、戦争でがんばれと見送ることで誰かを傷つけることをもう決してしないと決意し、手を振ることを拒み、誰も死なず生きてほしいという強い願いを持つようになった。